

ビワ生育情報

第 3 報
千葉県農林水産部
令和4年12月号

本年は11月の平均気温が平年より高く推移したため、12月2日現在において、「楠」、「大房」、「田中」の開花は平年より早く進んでいます。

樹及び花房の発育

ビワの開花期を表1に示した。

暖地園芸研究所の開花始期は、「楠」が11月10日で、平年より2日遅く、前年より8日遅かった。「大房」は11月22日で、平年より2日早く、前年と同日だった。「田中」は11月10日で、平年より2日早く、前年より5日遅かった。開花盛期は「楠」が11月21日で、平年より5日早く、前年より1日遅かった。「大房」は12月2日で、平年より15日早く、前年より8日早かった。「田中」は11月22日で平年より10日早く、前年より2日早かった。

花房の出蕾期は「楠」、「田中」は平年並み、「大房」はやや早く、10月の平均気温は平年よりやや低く推移したため、開花始期は平年並みだったが、11月の平均気温は平年より高い状態で推移し、開花盛期は平年より早かった。樹及び花房の生育は順調である。

表1 ビワの開花期(暖地園芸研究所)

品 種	開花始期(月.日)			開花盛期(月.日)			開花終期(月.日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11.10	11.8	11.2	11.21	11.26	11.20	—	12.24	12.8
大房	11.22	11.24	11.22	12.2	12.17	12.10	—	1.27	1.1
田中	11.10	11.12	11.5	11.22	12.2	11.24	—	1.7	12.12

平年：1992年～2021年の30年間の平均

令和4年11月の気象

令和4年11月の半旬別の気象を表2に示した。平均気温は第2半旬で平年より低く、それ以外は平年より高く推移した。月平均気温は15.1℃で、平年より1.7℃高く、前年より0.9℃高かった。

降水量は第5、第6半旬で平年より多く、それ以外は平年より少なく推移した。月合計は143mmで平年の91%、前年の83%であった。

日照時間は第1～第5半旬は平年より多く、第6半旬は平年より少なかった。月合計は163時間で平年の112%、前年の90%であった。

表2 令和4年11月の気象(暖地園芸研究所)

半旬	平均気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	16.7	15.3	15.7	0	19	7	28	25	33
2	14.0	14.9	16.2	3	30	52	33	25	20
3	15.6	14.0	15.3	16	27	0	26	24	43
4	13.1	12.8	12.8	6	27	1	32	24	21
5	14.0	11.7	13.9	75	34	110	29	24	25
6	17.1	11.7	11.3	44	20	4	15	24	40
平均/計	15.1	13.4	14.2	143	157	172	163	146	182

平年：1991年～2020年の30年間の平均

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

1月の作業

ビワは、厳寒期に入ると枝葉の伸長及び根の活動は停滞するが、開花は引き続き進行し、幼果はわずかながら肥大する。本年は、開花の進みが平年より早く、寒害を受けやすいと考えられるため、寒害対策を適切に行う。また、春以降の本格的な果実肥大に備えて追肥を行う。

寒害対策

ビワの幼果は、 -3°C 以下の低温に遭遇すると、胚(種子)が凍死し、生育が止まり落果してしまう。蕾あるいは開花中の花は寒害を受けにくい、受精後は幼果の発育が進むにつれて凍死しやすくなる。本年の開花の進みは平年より早いため(表1)、寒害を受けやすいと考えられる。

ビワの寒害は大陸性高気圧のもたらす寒波によって引き起こされる。本格的な寒波は1月中旬から3月上旬の間に数回襲来する。年内に準備する寒害対策としては、燃焼法、送風法、被覆法、耕種的方法がある。燃焼法は、園内をヒーターで加温して寒害を防止する方法である。送風法は、防霜ファンを設置することで、逆転層内の上方の暖かい空気と樹冠面付近の冷たい空気をかくはんし、気温を均等にする効果がある。燃焼法、送風法ともに、寒波が襲来する前に設置場所の整備と機器の点検等の準備をしておく。被覆法は、こも等の被覆資材で樹体を覆う方法であり、樹高の高い成木では難しいが、若木、幼木では利用可能である。耕種的方法は、樹体管理が基本であり、樹勢が旺盛になると着葉数が多くなることから、樹冠内の保温効果が増す。年間を通じて、施肥、病虫害防除及び樹体管理を適切に行う。また、冷気の停滞を防ぐため、防風林の下枝は事前に刈り込んでおく。

施肥

時期別の標準施肥量を表3に示した。果実の肥大及び春枝の発芽、伸長のための追肥は、春肥または実肥と呼ばれ、1月中に施用する。ビワの根は冬季もわずかながら伸長しており、2月下旬には活発になる。春肥はこの時期に合わせて施すのが一般的で、年間施肥量の30%程度を目安に施用する。土壌pHが低い場合には、苦土石灰などの石灰資材を施用し、pH6.0~6.5に矯正する。

苗木の植え付け

ビワの苗木の植え付けは、発芽直前で根の活動が緩慢な時期が良く、通常は2月中下旬が適期であるので、早めに準備しておく。枝や根の伸長が始まってからでは、植え傷みが激しく、発芽が遅れるので、天候や苗の発育をみて時期を逃さないようにする。

表3 ビワの時期別標準施肥量(成分量 kg/10a)

時 期	耕土の浅い園			耕土の深い園		
	窒素	りん酸	加里	窒素	りん酸	加里
9月中旬(基肥)	12	9	9	11	9	7
1月上旬(春肥)	10	9	5	7	8	3
6月上旬(夏肥)	5	4	4	5	3	3
合 計	27	22	18	23	20	13

(千葉県主要農作物等施肥基準より)

管理上の留意事項

1. 土壌pHは6.0~6.5に矯正する。
2. 苦土石灰は、化学肥料施用の2週間前に施用し、その後耕うんする。
3. 施肥後は軽く耕うんする。ただし、夏肥施用後は、その必要はない。
4. 有機物は積極的に投入する。有機物の深層施用には必ず完熟堆肥を用いる。

【問合せ先:千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室

電話 0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>